



●特集●

保育の質を高める記録

どのように記録し、どのようにそれを生かすことが、保育の質を高めることにつながるのか。大会シンポジウムでの熱い議論をまとめ、さらに展開することにした。

「保育の質を高める記録のあり方を考える」

高杉 展

1. 企画の趣旨

新幼稚園教育要領、新保育所保育指針に「保育者の専門性の向上」が記され、記録の重要性がより指摘されるなか、保育学研究第47巻第2号「保育フォーラム」『保育の質を高める記録』では、保育記録のあり方について論じられた。一方、保育実践の場では、さまざまな保育ニーズへの対応に追われ多忙さが増す一方で、説明責任という義務感が高まる中、保育記録そのものが安易に簡素化される傾向もあるのではないかと。そこで本シンポジウムでは、そのフォーラムの企画者の一人小林紀子氏（青山学院大学）を司会者として、秋田喜代美氏（東京大学）、河邊貴子氏（聖心女子大学）、渡辺英則氏（港北幼稚園）を話題提供者として迎え、以下の柱で保育の記録のあり方について議論を深めた。

- ①保育の場において記録とどう向き合い、保育の質を高める営みに参加してきたか
- ②子どもの発達・学びの過程、援助の過程をどう記録し「保育過程の質」「成果の質」を吟味しているか
- ③保育の記録を可能にする「保育の場」（「構造の質」「方向性の質」）をどのように考えるか

2. シンポジウムの概要

河邊氏からは、自らの12年間の保育記録を分析し、「遊び理解の視野」が拡張するとともに、記録の様式も試行錯誤しつつ変容していることが示された。その理由として「記録を書き続け、保育との連動を意識しながら読み返したこと」「他の保育者との話し合いや、第三者記録との付き合いを行なったこと」「様々な研修会や研究会で実践事例を提案し、『動態としての遊び』を、あるまとまりをもってみるという経験を積み

重ねたこと」をあげ、「書きっぱなしでは保育の質の向上には寄与しない」と強調された。また、保育の当事者が一人ひとりの子どもとその遊びを深く持続して理解するまなざしと同時に、空間俯瞰的に複数の子どもとその遊びを捉えるまなざしが必要であるとし、「保育マップ型記録」の提案がなされた。

渡辺氏からは、園長としての立場から、保育者同士の記録をどのように開き、語り合えるようにしていくか、その様々な取り組みの工夫について紹介があった。特に保護者を巻き込むことが不可欠であるとし、保護者も記録に参加することを通して、遊び理解や子ども理解を深めていく取り組みが具体的に示された。さらには、保護者も共に見ているという長期の映像記録をもとにその時々の子どもの行為の意味と育ちの過程について説明することの重要性を強調された。

秋田氏は、これまで取り組まれた研究や研修での様々な記録とのかかわりから、記録観を柔軟にする必要があると述べ、「誰でも出来る記録」「説明責任という義務感からの解放」の重要性が主張された。保育の過程については、数分のプロセスに焦点を当てる映像記録活用の研修紹介もあった。

3. まとめ

このように話題提供された様々な記録への取り組みは、単に記録をどう書くかというマニュアルやハウツーではなく、保育実践を問い直すものであった。保育記録が、ある個人が書くということだけではなく、園内外の対話につながっていくという営みであることを示唆していたのである。「書きっぱなし」ではなく、同僚、保護者、研究者など他者との対話を通してこそ、記録が記録として生きるのではないかと。そして、そのために工夫を重ねていくプロセスが、保育の質を高めることにつながるのではないかとと思われる。

●Profile

高杉 展（たかすぎ ひろし）
松山東雲女子大学 准教授
保育実践に学びながら子どもに即した保育実践のあり方と、教員として保育者養成のあり方を研究しています。
最近、2児の父となって、自らを含め、子育てという営みを問い直しています。

「保育の質」を高める記録とは

河邊 貴子

遊びは幼児期の重要な学習として位置付けられており、保育者の役割は、子どもの遊びがより自立的に展開するように適切な援助を行うことである。そのためには、子どもが遊びの中でどのような経験を積み重ねているのかを理解しなければならない。保育者による日々の保育記録はこのことに対していかに貢献できるのだろうか。

子どもは一人で遊ぶこともあるが、多くの場合、いわゆる「気の合う友達」と呼ばれているインフォーマルグループを形成して遊ぶ。子どもが環境に自発的に関わって遊ぶということは、園内のあちこちで同時多発的に複数のインフォーマルグループの遊びが展開しているということである。

そのどこか一か所に留まって「見る」ことができれば理解は深まり、援助はより適切になるだろう。しかしそれは現実的ではない。なぜならば、保育者は保育の当事者として全ての子どもに責任を負っており、他の遊び(子ども)にも必要があれば援助するという態勢を常にとっていなければならないからである。実際に遊びを中心とした保育において保育者は、頭の中にマップを描き、「どこで誰が何をして遊んでいるのか」を把握しているのである。全体の遊びの動向を意識しながら、今、自分はどこの遊びにどのようにかかわるべきなのか、援助の優先性を空間俯瞰的に考える。そして、断続的にならざるをえない理解をつなげて状況を瞬時に判断し、(必要と判断すれば)何らかの援助を行うのである。

つまり、保育者には全体の遊びを空間俯瞰的に把握しつつ、各遊びの理解を可能な限り深めるという思考が求められる。この思考を意識化するために保育記録は大きな役割を果たす。

そこで筆者は空間俯瞰的理解と持続的理解の両者を可視化する記録として「保育マップ型記録」を提案してきた。(拙稿『保育学研究』第46巻第2号109-121、参照)この記録法は、保育環境を図にした記録用紙に、遊びをマッピングし、そこでの遊びの状態を記述するものである。ただ単に遊びをトポロジカルにプロットし、「どこで誰が誰と何をして遊んでいたか」を書き込んだだけでは、翌日の保育につながらない。重要なのは記録の視点である。すなわち何を視点として遊びの状態を読み取るかが肝要である。遊びが自立的に展開するとは、子どもが遊びの課題を見出し、「人」「もの」にかわりながら没頭して取り組んでいるというこ

とである。子どもが自ら環境にかかわって遊びを生み出し、自立的に展開することを目指すならば、以下の視点で遊びの状態を診断し、自らの保育を振り返る必要がある。

- ・インフォーマルグループの遊びの経過と、そこでの子どもの経験を可能な範囲で持続的に理解しようとしていること
- ・その際、遊びの成立の要素としての「他者との関係」と「ものとの関係」の実際と、その子どもにとっての意味を解釈しようとしていること
- ・遊びと遊びは相互につながりをもちながら展開することを踏まえ、その関連を空間俯瞰的に視野に入れていること
- ・これらの理解に基づいて、次に必要な経験は何かを導き出そうとしていること
- ・その延長上に保育者の願いと具体的援助の方向を記していること

遊びが持続的であればあるほど、保育者は落ち着いて遊びを「見る」ことができるので、幼児の内的課題にそって援助の必要性や方向性を考えることができる。そしてそのことはさらに、遊びが一層、自立的、持続的になるという好循環を生む。保育記録はこの循環に寄与するものである。遊びを通じた教育が成立するかどうかは、短期的には前日の幼児の生活をベースにどう翌日の保育を構想するかにかかっている。その根拠として「日の記録」はますます重要であり、「保育マップ型記録」は遊びの援助において有効に機能するものと考えられる。

●Profile

河邊 貴子 (かわべ たかこ)

聖心女子大学 教授

「子どもをどう理解し、次の保育につなげるか、そして保育者はどう遊びを援助しえるか」について保育記録のあり方を切り口に探究しています。

保育者が記録を書くということ

大森 洋子

私が保育後にまず書く記録(一次記録)は、その日の環境構成や遊びグループ、遊びの移り変わりなどを図示し、できごとや気づきなどをメモするというものです。

その際、印象的なできごとを記録するとともに、一人一人について今日どうだったかを思い起こすようにしています。「A男、嬉しそうに『見てー』と言う」と記入して初めて、自分でできたことがあんなに嬉しかったのにどうしてもっと共感しなかったのだろうと反

省したり、「B子、『嫌だ』と言うが手をひくと一緒に園庭へ移動」と書きながら、B子の「嫌」は、「一緒にないと嫌」「一人では嫌」という意味なのだ気づいたりなど、意識的に振り返って記述することで、新たな発見や気づき、反省がたくさん出てきます。また、「D男、母と離れづらいがカメに餌をあげると笑顔」と書けば、明日は「カメさんに餌あげようか」と迎えることができるし、「EとF、今日もブロックの取り合い」と書けば、ブロックの数の問題なのか、やりとりの中での言葉の不足の問題なのか、二人の関係の問題なのか気をつけて見てみようというように、記録が翌日の保育につながることも多くあります。

印象的なできごとの記録は、自分自身が意味を見いだして取り上げていることなので、短い言葉の記述でも背後にある意味も一緒に記録していることとなります。たとえば、「G子、『着せて』とドレスを持ってくる」と花丸つきで記している背後には、これまでは何かして欲しいときにいつも目で訴えていたG子が、今日は言葉で要求してきたという意味があります。さらにその背後には、4月に要求を言えないG子に気づき、「ドレスが着たいのよね。着せてあげるね」とG子の気持ちを意識的に言葉で表しながらかわる日があり、「『着せて』って言うてくれるととってもよくわかるんだけどな」と言いながら着せる日があり、「『着せて』って言うてみて」と言わせてみる日があり、そういうかわりの積み重ねを経ての今日の「着せて」であったということも含んでいます。

このように、保育記録は子どもの変容記録であり、自分のかかわりの記録であり、さらに言えば、自分自身の子ども観や保育観の記録でもあります。記録を通していつも自分自身の未熟さやありように気づかされ、記録の重要性と必要性を痛感しています。

日々の記録とは別に、読み手を意識した保育記録を書くということもとても重要だと考えています。保育研究会などで使用する記録がそうです。ここでは、その時の状況やできごと、自分の考えやかかわりをできるだけ第三者に分かるように書くことが必要となり、省略はしません。言葉選びもかなり慎重になります。「つぶやいた」のか「たまたま目の前にいる私に言った」のか「庭にいる私の所へわざわざ来て言った」のかではずいぶん違うし、「叩いた」のか「あたった」のか、それに気づいているかどうかでも違います。私のかかわり方も、一人に諭すように言うこともあるし、周りの子どもたちにも聞こえるように言うこともあり、「言う」では表しきれません。

多くの読み手がこう読み取るだろうという言葉を選びながら何度も書き直していくうちに、私自身は、自

分の捉え方やかわりの意図などを明確にすることができたように思います。またその記録を読み合うことで、課題を共有でき、違った視点に気づくこともできました。

伝わらないということは書き方が悪いということであり、それは自分の捉えが不十分であるということでもあります。他者と共有できる記録を書き、共に読み合うことで、自分自身の保育を磨いていきたいと思っています。

●Profile

大森 洋子（おおもり ようこ）
山口大学教育学部附属幼稚園 教諭
トラブル場面では実は周りでなりゆきを見ている子どもが育っていたり、直接かかわってなくても見聞きする中で学んでいたりと、複雑で多方向的な子どもの人間関係に関心をもっています。どうすればその多様性が人に伝わる記録として表せるのか模索中です。

当保育所における子どもの見取りと記録の取り方

田中 美美子

当園では日々の保育記録は週日案という形式を使って書いている。保育所には0～6歳児までの子どもがおり、同じ形式で記録を書いてもその内容は子どもの発達、年齢によって変わってくる。乳児期には個々の愛着や身体発達に関する記録が多くなる傾向がある一方で、幼児クラスになると、愛着や個々の身体発達を基盤にし、日々の生活や遊びの中での友達との関係や、個々の心の育ちが記録の中心になってくる。

毎日行われる遊びの中で子どもの心の内を見取り、翌日の保育に生かすことは難しい。遊んでいる事実は子どもの様子を見ればわかることだが、そこで何を楽しんでいるのか、複数の子どもたちが互いにどういう思いをもちながら遊んでいるのかを見取ることが難しい。また遊びが見つからない子がいると、その子は何をしたら楽しいのか、どうして遊ぼうとしないのか、遊びを楽しんでほしいという保育者の思いとは裏腹に子どもの心の内が読み取れず、援助ができないのである。私自身、保育者になって1、2年目のころは子どもの内面が読み取れず、子どもとかみ合わない保育が続いていた日を思い出す。

当園には比較的若い職員が多く、「遊び」を中心とした保育の中で私が1、2年目に抱えていた思いと同じような思いを抱えていることが多い。「遊び」の充実をしたいが、どうしたらいいのか。そのために、週日案を書き、そこで、遊びの事実、子どもの内面を捉え記録し保育に生かさなくてはならないが、それが最も難しく悩んでいることが多いのである。

そこで、重要になっているのが、年に3回行う個人

記録の話し合いである。担任が書いた記録をもとに、他の職員が気付いた育ちを互いに話し合っていくのである。遊びへの援助が行き詰ったときには、職員同士で援助の方法を考えたり担任が気付かなかった変化を伝え、その子の育ちを確認したりするのである。

また、個人記録の話し合いのほかに、それぞれのクラスで年に2回行う「保育を見る日」という職員間の公開も、大切な役割を担っている。その時々によって公開時間は変わるが、主に午前中の遊びの時間を公開し、職員同士が保育や子どもの育ちを見合うものである。この中で、担任が気になっている子への援助の仕方や学級全体の育ちを考えていく。複数の目で保育を見ることで担任自身が気付かなかった子どもへのかかわり方の癖や保育場面で見落としていた子どもの気持ちなどに気づくことができる。

このような活動を通して、保育者自身、子どもの育ちを確認したり課題を知ったりし、子どもの内面を見る目を育てていく。そして新たに保育者の捉えた子どもの姿、内面を日々の週日案に記録し、翌日の保育へとつなげていくのである。

しかし、このような活動にも課題は多い。どの保育所も抱えている課題だとは思うが、子どもを長時間保育している保育所で職員が全員集まって子どもの話をするのは難しい。クラスの代表が1名出て話し合うことになってしまうことが多い。また子どもの話や保育を見合うために長い間職員が抜けていることも難しく時間的な制約もある。このような課題はあるが、それぞれの職員が子どもの育ちを見つめられるように、努力していきたい。

●Profile

田中 美美子 (たなか ふみこ)
 こどもの園 プラムハウス (保育所) 保育士
 子どもが主体的に環境にかかわって遊べる保育を目指して、日々子どもたちと共に奮闘中です。

記録を読みとることと保育の質

橋爪 千恵子

私の周囲では保育者の研修会が頻繁に行われ、そこに参加する機会が多くなった。ある研修会で次のような記録 (U保育所の保育記録) が取り上げられた。

「2歳児のAがお気に入りのブロックで遊んでいたら、Bが『これ僕使いたい』と取ってしまった。Aは泣きじゃくり、その状況を見ていた保育士がブロックを取ったBのところに行き話をする。3色セットのブロックの内、Bは1色だけを取り、残り2色のブロックをAに返す。

AB二人の間に沈黙が続くが、Aが大きな声で『はい』と言って残り2色のブロックもBに差し出す』というものである。

U保育所ではこの記録を基に園内研修が行われた。「保育者の思い・願いによって言葉かけが変わってしまう」「Aの思いとBの思いをどう受け止めるのがよいのか」「状況を見ていても保育者は子どもの気持ちを引き出すためにまず聞くことから始めた方がよいのでは」などの意見が出された。記録者である保育者は「もう少し待ってはいかがでしょうか」「Aがブロックを3色セットで使いたいことを再度Bに伝えようか」と悩んだという。そして、「かかわっているうちに子どもが主体でなく、自分 (保育者) が主体になってしまったことに気づかず、自己満足で終わってしまっていたと反省。この園内研修によって、記録からの読みとり、振り返りができて良かった」とまとめた。

この記録は「ブロック」に提出され、各保育所で討議された後、その内容が再びブロック研修会に提出された。「ブロック」とは、市内の5つの保育所から研修委員2名が代表として参加する研修会である。ある保育者は「“貸してあげる”という題がついているが、子どもは“貸してあげる”とは発していない、保育者がそのように受け取ったからか?」「ブロックを取ってしまったBにすぐに注意をするのではなく、思いを受け止める声かけをしたことで、Bも素直に保育者の話を聞いたのではないか」「この事例ですごくいいなあと思うのは、子ども自身が自分で決めているところ」「“貸してあげられる”ことが“えらい”ことだろうか? Aは本心からBに貸すことに納得していたのかな?」「“待ってはいかがでしょうか”と思いつつも“子どもの気持ちの代弁をした方がよいのでは”と揺れ動く保育者の気持ちは良くわかる」などの意見が出た。討議はさらに続けられ子どもの気持ちや保育者のかかわりについて、さまざまな読みとりの意見が出された。

“心が揺れ動いた”保育者は“今、この場面で自分が子どもとどう向き合ったらよいのか”と真剣に取り組んでいたからであるし、他の保育者たちは記録を読みとりながら、自分なら子どもとどう向き合っただろうかと真剣に考えている。みな自分の保育を振り返り他者の意見からも学ぶことで、子どもの発達を支えている。その保育者に支えられて、子どもは自分と向き合い相手とのかかわり方を学んでいく。参加していた私は、1つの記録が複数の保育者の思考経路を通過しながら、多面的に厚みと深みを増して捉えられていくことを実感した。

このような積み重ねの学習が、保育者自身の成長になり、それらが集積されて保育の質の高まりになって

いくのだと思う。そのお手伝いが少しでもできたらよいと私は考えている。

●Profile

橋爪 千恵子 (はしづめ ちえこ)
静岡県立大学 非常勤講師
保育の中でさまざまな問題に直面している保育者を支援しようと、小さな保育研究会を立ち上げ、学習会を行っています。

実践の思想としての ドキュメンテーション

塩崎 美穂

日本の保育者や保育を学ぶ学生と一緒に海外（といってもほとんどが欧米になってしまうが）の保育映像を見ると、しばしば同じような反応に出会う。それは、保育中にためらいなく記録を取る欧米の実践者に対する驚きである。「子どもが目の前にいるにもかかわらず、ポケットに入る程度のメモではなく始終ペンを走らせて記録を取るのはいかがなものか」「テープレコーダーで子どもの会話を記録するのはやりすぎじゃないか」といった批判まじりの素朴な驚き。そこには、私たちの思い描くあるべき保育者像が見え隠れしているように思う。

私たちは子どもに向かいあう時、「教師と生徒、能力の差、立場の違いなどの違いはあるが、相手も私も、それぞれ、自らの人生を生きるものとして対等である」（津守真『保育者の地平』ミネルヴァ書房 281頁）という保育の思想をもっている。科学的客観的にだけ子どもの能力を観察することを拒み、数値による根拠の重視が評価的なまなざしを保育の場に持ち込みはしないかと警戒する。子どもを余すところなく正確に把握したいという願いは、子どもを保育者の思い通りに動かそうとする欲望と表裏一体であり、そうした過剰なコントロールへの心配が異国の実践者へのとまどいとして現れているように思う。

保育者が突如記録者になって保育の場に現れることは（たとえ記録する時と保育する時を分けたとしても）、それまでに築いてきた保育者と子どもの関係を変容させるだろう。関係を変容させかねない記録方法を用いて子どもを把握しようとするこの是非については、私も継続して考えていきたいと思っている。

ただここで視野を広げてみたいのは、欧米の保育関係者もこうした問題に無自覚ではないということだ。評価や数値に縛られることへの批判はむしろ近年の保育研究の主流でさえある（Beyond Quality in Early Childhood Education and Care, Routledge, 2007）。私が念頭においてるのはドキュメンテーション（説明を

うながす記録）を編み、日々保育を創造しているイギリスのペングリーンやイタリアのレッチョ・エミリアだが、それらの場では、子どもが自らの人生を生きることを承認し、保育者が短絡的な評価に陥らないためにこそ複数の記録が活用されている。

ドキュメンテーションとは、ドキュメント（記録）ではない。例えば、子どもの絵だけではそれをドキュメンテーションとは呼ばない。絵を描くときの子どもの様子、子どもが話した内容、保育者のコメントなどが加えられ、保育の振り返りや子どもの経験した場面への再訪のような動きを生み出す記録群がドキュメンテーションとされる。記録群は、保育への活用を通してはじめてドキュメンテーションとして生成するということだ。それらはもちろん子どもを評価する指標ではない。数値による評価をこえ、保育者／保護者／子どもによる話し合い（ディスコース）の場をつくり出し、次の保育のデザインにつながっていく。実践の流れを支える資料（写真、ビデオ、子どもの対話の記録、子どもの絵、手作りの作品など）がドキュメンテーションである。そこには、習慣や制度に縛られず、今ここに生きている子どもや保護者とともに毎日の保育をつくり出そうとする＜実践の思想＞を見出すことができるだろう。

私は海外の研究や保育実践が日本よりも優れているとは思わないが、海外にも私たちと同じような悩みを抱えながら日々保育に向かう仲間がいることについては敬意を払い共に考える機会をもちたいと思っている。

●Profile

塩崎 美穂 (しおざき みほ)
お茶の水女子大学／熊本大学 非常勤講師
専門は保育思想史 主な研究テーマは「保育の公共性」で、公私にまたがる「保育」という営みの歴史的な日常性に関心がある。
広田照之・塩崎美穂／編著「教育原理—保育実践への教育学的アプローチ」（樹村房）など。